

台湾茶の歴史を訪ねる 第十八回

(18) 光復後 台湾茶業を支えた福建人たち (1)



須賀 努 (コラムニスト/茶旅人)

台湾茶業が日本統治時代に体系的な発展を遂げたことはこれまで何度か述べてきた。では日本人がいなくなってしまった1945年以降(一部の残留専門家はいたと思うが)、台湾茶業は台湾人だけの手で発展していったのだろうか。この疑問を解明すべく、製茶公会や茶商公会の会史などを読み漁っている内に、光復直後、多くの茶業技術を持った若者が、福建からやって来たという事実突き当たった。

今回は中国茶業界の泰斗と言われ、先年数え年108歳(茶寿)で亡くなったレジェンド、張天福氏と、彼が1935年に開設した福安初級農業職業学校(以下福安農学校)の卒業生の内、特に台湾茶業への貢献が高かったと言われている3人の弟子(呉振鐸、林馥泉、林復)について、彼らの人生を見ながら光復後の台湾茶業の歴史を振り返ってみたい。

中国近代茶業のレジェンド 張天福とは

2012年、福州を訪れた際、知り合いから『中国茶業界のレジェンド』を紹介すると言われ、その人の家を訪ねたことがある。当時103歳と聞いていたが、その肌はどうみても80代にしか見えず、掛かってきた電話を自ら取って、茶業指導を的確に行う姿は驚きであった。その老人こそが張天福、その人であった。

その後亡くなる前年にお会いした際は、張も係わって作られた紅茶が日本で受賞したことを報告、喜んでおられたのがとても印象的だった。最後は多くの茶業関係者に惜しまれて世を去った張だったが、その一生は決して平たんな道のりではなく、むしろ苦難の連続であり、同時に茶業に全てを捧げた一生でもあった。

張は辛亥革命の前年、1910年上海で生まれた。1歳で両親(医者、キリスト教徒)の故郷、福建



福州張天福氏とご自宅にて

省福州に戻る。20歳で南京の金陵大学入学、専攻は農学だった。卒業後協和大学農業試験場に勤務、1934年には静岡、台湾を視察し、茶業の機械化を学び、中国茶業の遅れを痛感する。そして弱冠25歳で福安社口に福安茶業改良場を設立し、場長に就任する。清朝崩壊、民国の混乱の中で遅れてしまった中国農業、特に茶業の近代化のため、機械を導入するなど、その革新的な手法で、大いに貢献している。

同時に福安農学校を開校し、校長に就任、これからの茶業を担う人材育成にも努め、既に20代で若い才能は十分に開花していた。その後1938年には、試験場の業務が武夷山赤石に移され、張も武夷山を中心に活動している。また民国政府の



張氏と農林庁で一緒に働いていた李冬水氏(96 歳)



1980年代 張氏と張乃英氏の評茶風景

依頼により、主要産業であった茶業を疎開させるため、当時未開の貴州省眉潭に半月歩いて辿り着いたという。そこで茶業に適した場所を選定し、試験場を設置、製茶工場まで作り（この茶工場は現存している）、段取りを整えている。

しかし戦争が激しくなり、茶業も停滞を余儀なくされる。抗日戦争終了後も、国共内戦に突入し、新中国建国後、ようやく茶業に着手する環境が整う。張は疲弊した中国茶業の復活のために、1952年福建省農業庁に出仕し、茶業改進黨で尽力し、生産科長、54年には副処長となっている。当時農林庁で一緒に働いていた、李冬水氏（1924年生まれ）は、『張天福は茶業技術の専門家であり、かつ組織をまとめる強力なリーダーシップを持つ稀有な人材だった』と振り返る。

解放後、張は中国茶業界では呉学農氏と並び、茶業近代化を推進する中心人物になっていた。だが50年代に繰り広げられた反右派闘争が彼をも巻き込んでしまう。1959年には右派と認定され労働改造へ送られるなどの辛酸をなめ、名誉回復は文化大革命を経て23年後となってしまふ。一番の働き盛りを一体どんな気持ちで過ごしていたのだろうか。

それでもまだ多少自由があった間は、茶業関連の文章なども書き、その発展のために尽くしている。

だが1966年から始まる文化大革命では、その活動を完全に止められてしまう。李冬水氏は『文革中でも春節初日は必ず張氏のところへ挨拶に行った。当時そんなことをする人間は自分ともう一人、やはり農林庁の同僚だった李一金氏（福安農学校卒）しかいなかった』といい、張からは『真の友人』と言われていたと懐かしそうに語る。

1980年代、名誉回復され、公の場に姿を現した時は、既に70歳を過ぎ、退職年齢になっていた。それでも各地で活発に茶の啓もう活動や茶業指導を行い、『茶業界のレジェンド』と呼ばれるようになっていく。元樟州茶廠で製茶を担当していた張乃英氏は当時張と評茶活動などを一緒にしていたが、『対応が極めて厳格であり、泰斗の隣で行う評茶は常に非常に緊張した』と張の茶への厳しい姿勢を語っている。

103歳の張を自宅に訪ねた時、その頭は全く衰えていなかった。近年流行りの紅茶作りにも知恵を出し、有機茶園にアドバイスするなど、高品質の茶を生み出していた。ご本人から分厚い著書『茶業人生』を頂いたが、そこには数多くの茶業関係者が師と仰ぎ、寄稿していた。最後は数え年108歳、茶寿の歳（2017年）にこの世を去っている。まさに茶業人生、茶のために生まれてきた人だった。

## 福安農学校のこと

福建省の省都福州市からバスで2時間ほど行ったところに福安市はあった。19世紀には茶葉の集積地として栄え、坦洋工夫という紅茶を生み出した街である。だが現在の福建省には武夷山や安溪などビックな茶産地がいくつもあり、決して目立つ存在とは言えない。

その福安に、1935年日本と台湾の視察を終えた一人の若者がやって来た。それが張天福。そして彼は中国の遅れた茶業の近代化を目指して、この地に茶業人材を育てるべく、学校を作った。それが福安初級農業職業学校（現在：寧徳職業技術学院）の始まりだ。

その年の教員名簿を見ると若干25歳の張が校長として1番目に書かれており、他の教師陣も30歳前後を中心として非常に若い構成となっている。一方学生も福安は勿論、福建省全土、更には省外からも学生が集まった。一期生83人の内、福安出身が65人、その中には後世、台湾茶業の父とも呼ばれる呉振鐸が含まれている。その他林復、李孟昌など、後に台湾に渡り、台湾茶業の現代化に尽くす、逸材が学んでいる。因みに学生は14-17歳が殆どだったようだ。



往時の福安農学校

一体なぜ福安社口（福安市内から20km）という地に学校を作ったのだろうか。実は張は学校と同時に茶業改良場も設置して、場長として赴任していた。この地に設立した趣旨は、①福安は閩東の中心地であり、政府の支持が得やすい②水陸交通が便利③坦洋工夫茶発祥の地であり、茶商も多く、茶葉の集積地である④驚くべきことに当時閩東は福建全体の60%以上の茶葉生産地であった。学校と改良場は当然ながら一体だったということだ。

1936年には日本から紅茶製造機械を輸入してここに設置して、製茶の機械化を図っている。また農学校の学生の製茶研修の場としても活用され、労働者として働いていた。ただ38年には主業務を武夷山に移転し、福安は分場とされており、張自身もここを去っている。

先日その農学校を訪ねてみた。夜だったが、製茶研修の真っ最中で、学生が製茶に励んでおり、今でも張天福精神が受け継がれているように感じられた。突然の訪問ではあったが、温かく迎えられ、張天福茶文化研究中心で、女子生徒が茶芸を披露し、お茶を淹れてくれ、先生方と即席交流会をして、お互いの資料を交換した。

その中で筆者が『2018年9月に台北で98歳の林復氏（第一期卒業生）と面談した』と告げると、戸惑いの声が上がった。実は学校にも資料は乏しく、林復という名前を卒業名簿で見たことはあっ



福安農学校 張天福茶文化研究中心で

たが、著書もある林馥泉と同一人物（書き損じ）だと誤解していたというのだ。やはり第二次大戦後の中台の断絶は、その後の交流を妨げており、卒業生の所在すらも曖昧にできてしまっていた。

## 台湾茶業を支えた第一人者 呉振鐸

今回取り上げる3人の中で、中国・台湾の茶業界で最も有名なのは呉振鐸であろう。茶業改良場のトップを長く務めたこともあり、台湾茶業界への貢献は大きく、また台湾大学教授として多くの論文を残しており、弟子と呼ばれる人々も数多くいる。更には1980年以降福建省に何度も里帰りして、中国の茶業界との交流も深かった人物である。

呉は1918年12月に福安で生まれた。幼い時より病気がちだったが、両親、祖母が茶作りをしているのを見て育ったという。福建省立師範に入学したのは、台風により福州で行われた統一試験が受けられず、唯一入れる学校だったから、と本人が述懐している。1935年、病氣療養で帰省中に、福安に高級茶科が創設されたので、そこの第一期公費修学生となった。それが福安農学校であり、恩師張天福との出会いとなる。



茶葉人生



会議で発言する呉氏

すぐに抗日戦争が始まったが、夏冬の休みを利用して、福安の茶業改良場及び政和、武夷山などの茶区に入り、実習を積み重ねると同時に生産指導なども行っている。また張天福の『茶業統一購入 統一販売政策』（茶業の体系化、生産販売の一体化）を執行したとも言われている。同時に1938年武夷山に移された示範茶廠では半発酵茶の製法なども学んでいたようだ。

国共内戦の最中、呉は1942年に福建省立農学院農藝学系に入り、茶業関連の資料収集などに当たる。卒業した1946年には家庭の事情で故郷に戻り、母校、福安農学校で教鞭をとっていたが、翌年には政府の奨励に従って台湾に渡っている。1947年の卒業生で呉の教え子であった李一金氏（1928年生まれ）はその回想の中で『当時福安農学校は学費免除で、毎月25斤の米が配給された』と言い、『1947年に呉老師は優秀な教え子を沢山選抜して台湾に連れて行った。私も誘われたが、木造船で渡るのは危険だ、と母親に止められ断念した』と語っている。当時の台湾行は命がけであったことが分かる、と同時に呉が新天地台湾に賭けていた様子も窺える。

蔡彩燕女史と結婚後、夫婦で台湾行を決意する。1947年の渡台後、平鎮茶業試験分所製茶主任となる。その頃の試験分所はまだ荒廃しており、設備も不足し、スタッフは20人もいなかったという。



渡台直前の呉夫妻

光復後の混乱期、1948年になると政府は試験所と公営事業を一体化する。これにより台湾農林が試験分所を引き継ぎ、所長が辞職後、呉が副技術師兼所長として、試験業務以外に育種及び茶生産の政策立案などを行うことになる。1955年に公営事業の民営化に伴い、再び農林庁農業試験所の所属となり、本格的な茶業政策に乗り出していく。

1958年には龍潭に茶園管理全般の模範茶園を設定し、剪定、施肥、摘採など総合的に研究、研修し、これを全台湾に広めていく。台湾東部の花蓮や台東に試樹したのもこの頃である。また1962年には茶業の人材不足を補うため、試験分所で2年間の研修制度を実施するなど、教育にも力を入れている。

1968年には、林口茶業伝習所、魚池及び平鎮試験場を統合して、現在の台湾省茶業改良場となり、その場長に就任。茶業の機械化、茶園の規範化、コスト削減、などを推進しており、呉は一貫してそのトップとして活動している。またこの頃、日本向け煎茶製造の規範化を図り、台湾煎茶の輸出を促進している。

呉の数ある業績の中で茶農家など茶業者にもっとも有名なのは、新品種開発とコンテストの評茶員ではないだろうか。台湾の品種の中心は長らく青心烏龍であったが、呉は新品種開発に尽力し、

15の開発に携わったと言われている。中でも有名なのが1982年に正式に命名された烏龍茶、包種茶に適した金萱（台茶12号）と翠玉（台茶13号）であろう。

これらの品種は日本時代に日本人が残していった3000株の茶樹の中から選抜され、呉らが長年かけてようやく開発したものだ。特に金萱種の普及は、台湾の茶農家を大いに潤したと思われるが、当初は農家から受け入れられなかったとの話もある。ただ呉は粘り強く農家と話をして、その普及に努め、それが今日の台湾茶を支えたともいえる。因みに呉のその思い入れからか、金萱、翠玉は、呉の母と妻の名から取ったと言われている。

また台湾茶と言えば、比賽茶（コンテスト茶）が有名であるが、従来の茶師の技能コンテストから、消費者に望まれる茶の選抜への切り替えに、呉は大きな役割を果たしている。既に以前述べた通り、台湾茶は1970年代に『輸出から内需へ』の大転換を図ろうとしており、台湾人に茶を飲ませる試みの一つとして、優良茶比賽が導入された経緯がある。

1975年に新店で行われた包種茶、道路整備のた



1976年鹿谷比賽で評茶する呉氏

め1年遅れて開催された鹿谷の凍頂烏龍茶の2つのコンテストは、まさに官民一体となって行われたイベントであった。この2つのコンテストで審査員を務めたのが、呉場長であり、その後も長年に渡り、各地で開催されるようになったコンテストで審査員を務めている。

呉から多くを学んだという鹿谷農会秘書の林献堂氏によれば、『呉先生はその評茶に関しては極めて厳格な方で、同席した評茶の場では、ピンと空気が張り詰め、助手も会話することができないほど、非常に緊張感があった。評茶終了後、先生が残った茶を飲んでいいぞ、と言っても手を出すものは誰もいなかった』と述懐する。化粧をした女性が評茶室に入ることを拒んだなどというエピソードもあり、このブレない厳しさが、光復後の台湾茶を支えた原動力ではなかったと思われる。

又、呉は1952年から台湾大学の教授にも就任しており、茶に関する数多くの研究成果、論文なども発表してきた。その内容は品種改良や茶園管理から茶の歴史に至るまで実に多岐にわたっており、後輩研究者にとっては大いなる遺産だ。台湾大学図書館を訪ねると、その論文集を手にとることができたが、何とそれは呉が自ら図書館に寄贈した現物であり、直筆の文字を見ることができたので驚いた。呉は実は今でも我々の身近にいるのだ、と感じられる瞬間だった。

1981年に場長の座を辞し、84年には完全に茶業改良場を退職した呉は、1982年に設立された中華民国茶芸協会の初代理事長として、天仁茗茶の李瑞河社長などと協力して、台湾茶芸の普及に努めている。これも輸出から内需への移行促進の一環だろうか。この活動に伴って、再開された中台交流で、中国を訪れることも多くなり、故郷福建をもたびたび訪問している。東南アジアの華人茶商を訪ねると、皆が口を揃えて、『1990年頃、台湾茶芸が入って来なければ、東南アジアの中国茶業は終わっていただろう』という。新しい茶業の形



台湾大学に論文集を寄贈

は台湾だけでなく、世界を喚起し、呉はそれに大いに貢献したと言えるのではないか。

1980年代、名誉回復されて公の場に姿を現した張天福と、今や台湾茶業の師と仰がれていた呉振鐸、この子弟は40年近い歳月を経て福建で再会を果たしており、その写真は何枚も残されている。一体二人はここで何を話し合ったのだろうか。茶業に命を懸けていた彼らは、恐らくは昔話はほんの少力で、大半は茶業の行く末、課題について、熱のこもった議論を交わしたのではないだろうか。福安農学校の弟子は、師よりずっと早く、2000年に惜しまれつつこの世を去った。



張氏と呉氏の福建での再会